

# 未刊行資料の解読によるフレーベルの家庭育児書 『母の歌と愛撫の歌』の成立に関する考察

小笠原 道 雄

A Study of the birth of the Song and Music of Fröbel's Mother Play ("Mutter-und Koselieder"): Examining its Unpublished Material (Nachlass)

Michio OGASAWARA

**Key words** : フリドリヒ・フレーベル Friedrich Fröbel, 『母の歌と愛撫の歌』 the Song and Music of Fröbel's Mother Play ("Mutter- und Koselieder"), 未刊行資料 Unpublished Material (Nachlass)

## 問 題 提 起

教育史上、フレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』は、ペスタロッチー／クリューズイ (Pestalozzi / Krüsi) の『母の書 (Das Buch der Mutter)』(1803) の系譜に繋がりながら、それを凌駕する最高の「家庭育児書」と位置づけされてきた。とりわけ、フレーベルの本書が、「詩」、「絵」、「音」(メロデー) という三位一体の内容をもつ、「家庭育児書」として、特異なかつ最高の「書」と評価されてきたのである。しかしながら、本「家庭育児書」が、フレーベルのどのような意図で、どのような経緯を経て、どのような形態で刊行され、普及したのかについては、1990年代まで、正確な解明がなされないままに、今日に至ってきた。その多くの要因は、フレーベルの没後、本「家庭育児書」に関する原稿、草稿類の多くが、妻のルイーゼ (Luise Frobel, geb. Levin) によって色々な場所に送付され、保管されたことによる。なかでも、フレーベルの遺稿を直接手にすることが出来た弟子の W. ランゲ (Lange) は、必ずしも、十分な草稿類の校閲を施さないままに編纂版『母の歌と愛撫の歌』を1866年刊行する。その後、さらに、フレーベル研究者の J. プリューフアー (Prüfer) が「音譜」(メロデー) を削除 (添付しないままに) して、1911年『母の歌と愛撫

の歌』を刊行する。この J. プリューフアー版が、フレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』として広く社会に流布されることになった。

さて、私たちが今日手にすることが出来る『母の歌と愛撫の歌』のオリジナルは、1844年、フレーベル自身によって、以下のタイトルで刊行されている。すなわち、「Kommt, lasst uns unsern Kindern leben!” Mutter- und Kose-Lieder, Lieder zur Körper-, Glieder- und Sinnenspielen. Zur frühen und einigen Pflege des Kindheitslebens. Ein Familienbuch von Friedrich Fröbel, Blankenburg」。ここには、発行年が記されていないこと (o. j.) に私たちは注意を払わなければならない。実は、私たちが普通目にする『母の歌と愛撫の歌』の最も古い版は、すでに指摘したランゲ (Wichard Lange) による “Mutter-und Koselieder, Dichtung und Bilder. Ein Familienbuch von Friedrich Fröbel”, 2. Aufl. Berlin, (1866) であり、最も普及したのは、プリューフアー (Johannes Prüfer) による “Friedrich Fröbels Mutter- und Kose-Lieder,” (Faksimile, Leipzig) (1911) で、中でも第4版の1927年版である。ちなみに、わが国で1933年、ドイツ語版から直接訳した茅野蕭々 (ドイツ文学者) 本は、この Prüfer 版からである。しかしながら、上記プリューフアー版には、いずれも R. コール (Kohl) の楽譜が添付されていないのである。これは一体どう

したことなのか。本来、フレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』は、詩と絵と歌の三位一体からなる当時としては世界に類をみない育児書として評価されてきたがそのメロディー（音譜）の部分が欠落しているのである。

2005年11月、「フレーベルの遺稿に関する目録（Findbuch）作成」調査のため、Bad Blankenburgの「フレーベル博物館（Fröbel-Museum）」ならびにBerlinの「陶冶史研究図書館」（略称BBF；Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschung）を訪問調査中、全く偶然なことから、楽譜に関しては、Fröbel-Museumで、絵（スケッチ）等に関しては、BBFの地下保管室でそれぞれオリジナル資料等（一般にBN資料と呼称）を発見し、調査し、一部重要な箇所を写真による資料収集が出来た（その後、毎年、BBFとFröbel-Museumを訪問調査し、関係資料のほぼ全体の『資料』を写真によって入手した）。今回、それらの資料から、特に、第一部として、BBFの資料（一般にBN資料と呼称）を中心に家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の成立過程を、続いて、第二部では、Fröbel-Museumの資料（一般にBIM資料と呼称）を中心に「メロデー（本）」を考察することにする（ここでは、オリジナル資料が『絵（スケッチ）』類に関してはBBFに、『楽譜』等に関しては主としてFröbel-Museumにそれぞれ分散して保存されていることに注意してほしい。（その理由は、フレーベルの死後、ルイーゼ夫人がフレーベルの遺稿類をそれぞれ分散して親類や知人に送付し、それが今日いろいろな経緯を経て、BBF、フレーベル博物館そしてプロイセン文化財団（一般にKN資料と呼称）（ベルリン）に保管されたようである）。

このような経緯から判明することは、フレーベルの本家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』に関する「資料」（「遺稿」を含む）類が今日まで統一的に保管・整理されることなく、ランゲ版やプリュウファー版のみに依拠して紹介され、普及してきたことが、逆に、本書に込められたフレーベルの意図が曲解され、流布されることになったと考えられる。その意味でも、「資料」、「文献」類が、1990年のドイツ統一によって、BBF（旧東ドイツ教育科学アカデミーのフレーベル遺稿（一般に、「ベルリン遺稿（Berliner Nachlass）」として、APWAの略称で表記されている）を含む）、「フレーベル博物館」に集中的に保管され、その上、相前後して、旧西ドイツのドゥイスブルク（Duisburg）大学

付設『フレーベル研究所』が、ドイツ学術振興会（Deutsche Forschungsgemeinschaft: DFG）の財政的援助を受けて、所長H.ハイラント（Heiland）教授を中心に約2000通といわれる「フレーベル書簡」類の収集と解説を精力的に遂行して、2006年、5巻のCD-Rで公刊したことは、フレーベル研究にとって画期的な出来事であった。その後、BBFの専門家によるこのCD-Rのタイプ化が現在も進行中で、現在その約三分の二が完了しており、本論究でも、BBFの古文書専門員のU.バジコ（Basik）博士の協力やBad Blankenburgの「フレーベル博物館」館長のM.ロックシュタイン女史の全面的な支援によって、未刊行資料の解説が可能となった。なお、この間私は、1995年、H.ハイラント所長、K.ノイマン（ドイツ就学前教育委員会委員長・現ドイツフレーベル学会会長）教授、M.ロックシュタイン女史等と共に、「日・独フレーベル会議」（その後、「国際フレーベル学会」に改称）を立ち上げ、1996年5月、第1回の会議を、Bad Blankenburgの「フレーベル博物館」（この博物館は、フレーベルが1840年6月28日、世界で最初の「幼稚園（Kindergarten）」を創設した記念的な場所である）で行い、国際的なフレーベル研究機関の創設に務めた。その後、この国際会議は隔年開催され、第7回が来年、5月ベルリンのBBFで開催予定である。また、現在、フレーベルの書簡類に関しては、国外からでもインターネットを利用しての検索が可能である。名称はKalliope Portal, <http://kalliope.staatsbibliothek-berlin.de/kd/hello.html>である。

## 第 一 部

### 1 『母の歌と愛撫の歌』に関する先行研究

さて、本論に先立ち、ここで『母の歌と愛撫の歌』に関する先行研究を一瞥しておこう。言及したようにLange版においては、編者による簡単な「まえがき」があるが、文献学的に本書の成立過程についての言及はない。次のPrüfer編の版においては、「この著作が生れ出た精神」のタイトルで、かなり長文のプリュウファーの跋文が掲載されている。本書の精神、フレーベルの生涯と活動そして本著作成の協力者、すなわち、絵画の制作を担当したウンガー（Friedrich Unger）と作曲に関わったコール（Robert Kohl）についての紹介をしている。全体的に、本書のロマン主義的特徴が強調され、本書が「ドイツ精神生活の一片であり、ドイツロマンテイクの一残物である」とも述べている。

ただここでも文献学的な意味での成立に関する言及はない。文献学的な考察がなされるのは、驚くことに1982年刊行されたH. フレーベル/D. プフェラ編著：Hermann Fröbel und D. Pfaehler (Hrsg.) “Kommt, lasst uns unsern Kindern leben—Friedrich Fröbels Mutter- und Koselieder. Mit zwei Beiträgen über Friedrich Fröbel und einem Quellenanhang” (Mitteldeutsche Verlagsgesellschaft) においてである。特に、本著に所収されているK. レンナー (Karl Renner) による論文「楽しい幼稚園の家を作ろう！フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の理解のために」(Baut das Haus zum frohen Kindergarten! Zur Verständnis von Fröbels “Mutter- und Koseliedern” (s.s. 185-199) が重要である。中でも注目されるのは、本論文の結論部で述べられる「『母の歌と愛撫の歌』の運命と意義」(Schicksal und Bedeutung der “Mutter- und Koselieder”) の箇所である。そこでは、フレーベルの入念な本著刊行の取り組みが指摘されている。だが、刊行に伴う高額な印刷費等の財政的問題から、刊行に際しては、本書の魅力をさらに増すことを念じながらも、オリジナル版の改訂(縮小、型番の変更、メロデーの組換えさらに挿絵の新たな制作等々)が図られたことが述べられている。また1984年、ケーニッヒ (H. König) によって旧東ドイツ (DDR) から刊行された小型版の“Mutter =, Spiel = und Koselieder” は、今日BBF保管のウンガーの手になるオリジナル資料の一部分の複写である。しかしながら、両書には、きわめて遺憾なことに、本書の具体的な成立や複写に関する物的資料については全く言及されていないのである。ようやく、1999年、第二回のフレーベル国際会議でE. クネヒテル (Erika Knechtel) がパートブランケンブルクのフレーベル博物館所有の一部資料を使って「フリードリヒ・フレーベルの『母の歌と愛撫の歌—乳幼児のための教育的構想—」(“Die Mutter = und Koselieder Friedrich Fröbels — eine Erziehungskonzeption für das Kleikind”) のタイトルで報告し、「メロデー」と「絵」とが分離された初版本(そもそも発行年の記入のない(o.j.)本の何をもって初版本というのか)らしき存在を示し、われわれを驚かせたのである。なお、私たちの国でドイツ語版からの翻訳本(岩波書店、1933)の訳者である茅野は「訳者の言葉」で「我が国唯一の初版本の所有者東京女子高等師範学校教授倉橋惣三氏が、門外不出の珍宝を特に岩波書店に貸与された好意の賜物」と記している。残念ながら、今日まで本書の存在を確認できな

い(当然、実物を手にしていない)でいる。もう一つ、京都大学中央図書館(以前には、教育学部図書室)に「初版本」とおぼしき『母の歌と愛撫の歌』(発行年の記入のない、しかも「メロデー」(楽譜)が添付されていない)が保管されている。実物を手にして調査をした結果、初版の一冊と思われる(ただし、別冊の「メロデー本」は添付されていない)。ここでわれわれは、倉橋惣三著『フレーベル』((大教育家文庫20), 岩波書店、1939年)の138頁を注意深く読むと注目すべき一文に出会う。倉橋は、『母の歌と愛撫の歌』の成立を1844年のブランケンブルヒ刊行であると述べ、その特徴を述べながら、「わたしは、ブランケンブルヒのフレーベル博物館にあった二冊を、館の理事会まで開いて貰って漸く手に入れたのであるが、装丁といひ、一切の図案といひ、殊にウンガーの挿絵に至っては、まことに古雅掬すべきものがある。」(引用は原文のママ)と記している。この「フレーベル博物館にあった二冊」という倉橋の表記に注目してほしい。倉橋がフレーベル博物館で手にした「二冊」とは、以下、考察するように、果たして、絵本とメロデー本別々の「二冊の仮とじ本」であったのであろうか。結論的に、そのようにわれわれは判断できる。

## 2 家庭育児書の構想と印刷、刊行

1842年12月9日、フレーベルは、ゲラに住む叔母のM. シュミート (Friederike Schmid: 通称 Muhme Schmidt) に子どもの遊びを適切に導く手引書の編集、刊行について書簡を認めている (vgl. Pösche 1887, s. 101)。実は、すでに1841年、フレーベルは、最初の遊戯のコンセプトを乳幼児のための遊びと歌による教育的試みに展開していた。しかし1842年12月段階ではまだ印刷されていなかったが、製図家ウンガー (Friedrich Unger) は、すでに、21図を試作していた。フレーベルはこの作品を仕上げるためには、かなりの時間が必要であると考えていた。フレーベルとウンガーの間では、多くの談合が必要であり、また、ウンガーによって描かれた図像と音楽的伴奏(メロデー)を一致させ、フレーベルの教育的基本コンセプトを芸術的に高度の教育的作品にするため作曲家コール (Robert Kohl) が加えられた。1843年夏、印刷が計画される。Bad Blankenburgの「フレーベル博物館」(Fröbel-Museum)には、フレーベルのオリジナル手書き (Originalhandschrift) の『母の歌と愛撫の歌』に関する「広告 (Anzeige)」が存在するし、又、

2部の広告印刷物が保存されている。1844年春には、『母の歌と愛撫の歌』に関する「広告」(資料1)が出版社から刊行され、そして遂に、1844年3月18日に出版される。同日、『母の歌と愛撫の歌』に関する「評論 (Rezension)」と R. コールによる作曲が『新音楽雑誌』に掲載された。1844年4月3日、「村新聞」とその他の新聞に、二冊の出版物、つまり、『母-遊戯-愛撫の歌、フリードリヒ・フレーベルによる家庭育児書』(“Mutter-, Spiel- und Koselieder ein Familienbuch von Fr. Fr.”)のタイトルを持つ主著(資料2)とコールによるメロデー本(資料3)の二冊の刊行が案内されている。この事実を私たちはどのように理解したら良いのであろうか。

1844年、『母の歌と愛撫の歌』には、R. コール (Robert Kohl) による『44曲の母の歌、愛撫の歌と遊びの歌』が付録として添付されると同時に、独自の作品として出版された、と判断される。以下、この事を吟味したい。

### 3 フレーベル (Fröbel) とコール (Kohl) の未刊行書簡からの考察

ブランケンブルク、1844年2月26日の日付をもつフレーベルからコール宛の書簡は、上記の事実の判定に一つの解決の手がかりを与えてくれる(オリジナル資料は Handschrift (手書き)、資料4参照)。

「まったく私の意思に反するのでもなく、いわんや、全く貴殿の愛すべきかつ子どもらしい音楽詩の見解に逆らうわけではないのですが、ライブツイヒの音楽評論家側に寄与するために私は二冊の適切に処理された家庭育児書の仮とじ本を貴方に送ります。ライブツイヒへの発送のための一冊は、緑の仮とじ本、もう一冊は黄色の仮とじ本で、同様の装丁の音楽小冊子を刊行している会社です。

二様の仮とじ本の家庭育児書を私は、今日はいじめて製本屋からうけとり、すぐに、貴殿に送らせました。ただ一冊には私も困惑しており、貴殿が両編集局員(の意見)に従わざるを得ないのではないのでしょうか。(以下略)」(資料(4) Handschriftliches Brief von Friedrich Fröbel an Robert Kohl 26. 02. 1844)

この文面から明らかなのは、家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』が出版社から二様の仮とじ本(見本)として刊行されたこと。そして書物の形式は無論のこと、内容も編集者の意向による所が大であるということである。

### 4 『母の歌と愛撫の歌』の刊行と当時の出版事情

周知のように『母の歌と愛撫の歌』は、1ページ全体を使った、母親と遊ぶ子どもを描いた版面にフレーベル自作の詩がついたもので、それに説明と音符のついた歌が加えられている。それは、その形態においてフレーベルの他のあらゆる著作と異なっている。当時、このような形態の書物を刊行するには相当の印刷技術(板画、音符の印刷)を備えた出版社の存在が必要であったであろう。この問題に若干の示唆を与えてくれる記述が、1914年ライブツイヒで刊行されたプリュウファーター著『フリードリヒ・フレーベル』(Friedrich Fröbel. Druck und Verlag von B. G. Teubner in Leipzig, 1914)に何われる(ただし、大幅に改訂された1927年刊行の第2版にはこの記述はない)。その78頁; 13. 『母の歌と愛撫の歌』に関する叙述の欄外に「このようにまれに見る素晴らしい書物、その細部に亘るまで、1844年のオリジナル(書物)に忠実に模写され、驚くほどの安い値段で新たに刊行されたのは、出版社、Ernst Wiegandt-Leipzigの真の貢献である」と述べている。そして一葉の絵(Tick, Tack)を挿入しているのである。もう一つ、当時のこの種の出版物にとって重要な示唆を与えてくれるのが、F. ハルフター (Fritz Halfter) の浩瀚な伝記書『フリドリヒ・フレーベル。人類教育者への形成過程』(Friedrich Fröbel. Der Werdegang eines Menschheitsziehers. 1931, ss. 747-748)の一節である。ハルフターの記述は直接『母の歌と愛撫の歌』の成立過程に関わるものではない。叙述の中心は、フレーベルの『教育全体』(Erziehungsganzes)を巡る戦いであるが、その実現の窮状を書簡でJ. A. バーロップ (Barop) に訴えているのである。「ライブツイヒの企業(出版社か? 筆者)からの期待される収入を担保に800ターレル」(s. 748)を工面して欲しいというのである。しかし、周知のように、『母の歌と愛撫の歌』の刊行には膨大な費用がかさみ、フレーベルは財政的な窮地に陥るのである。もうひとつ当時の出版事情について、特に注意を要することは、時代状況と書物刊行の関係である。この面では特に、出版業者ヨーゼフ・マイヤー (Joseph Meyer, 1796-1856)の協力が何われるのである(vgl. R. Boldt/W. Eichler; Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1982, s. 101)。R. ボルト/W. アイヒラーによれば、時代的には、三月前期(ドイツの三月革命に先立つ時期)は、諸百科辞典類が政治的意識の先鋭化を促し、芸術や詩や学問に対する熱狂がより民主的な色

彩を持つようになった時代であり、とりわけ市民層出身の女性たちは、公的な仕事に対する関心を強く表明していた。幼稚園教師の職業はそのひとつであった。フレーベルとマイアーは共々女性に大きな期待を抱いていた。その際、フレーベルは、幼稚園での活動に関わるだけでなく、家庭での教育活動にも深い関心を寄せていた。関心は、就学前の教育、それもできるだけ早期の幼児を対象とする教育、家庭における母親と乳幼児の教育的関係の保持、その教育手段としての『遊具』の作製、否、『教具』よりさらに深化した手段、それは母親と乳幼児が共に自分の体（身体＝四肢）を使い、感覚（見る、動く、聞く、歌う等）を鋭くし、「予感」を鋭くする教材、それが『母の歌と愛撫の歌』の構想にむすびつくのである（図像学的には、O. F. ボルノー（Bollnow）のように、フレーベルの「ロマン主義的解釈」も成り立つ。この解釈が広く一般に流布することになるが）。

なお、『母の歌と愛撫の歌』の制作に関するフレーベルとJ.マイアヤーとの関係を示す直接的な資料（書簡等）は、現時点では一点発見されている。それは1844年、「キンダーガルテンの広告用パンフレット」に添付してヒルトブルグハウゼンのマイヤーに宛てたフレーベルの添付草稿である。BBFの古文書専門員U.バジコウ（Basikow）博士の好意で、本資料を入手して世界で初めて解読することができた（資料5）。文面から判断して1844年2月頃の本草稿書簡で、フレーベルは「愛撫の歌」（フレーベルは‘Koselieder’とだけ記している）を読者が手にする手段について細心の注意を払っている。とくに、書物を提供する際、カバーの表表紙を包装間紙（Maculatur Bogen）にすることを提言し、それによって、読者は表表紙から書物の内容が判断することができ、それによって、思考や概念を感情に結びつける、つまり、『愛撫の歌』を一つの事物直観（Sachanschauung）に結びつけるもので、それはフレーベルにとってまさに本質的なものである、と述べている。かくて、人々は、『愛撫の歌』を手にすることによってキンダーガルテンの理念が世間に与えられることを指摘し、マイヤーの意見を求めているのである。その他、両者の関係を示す第二次資料として、三通の書簡が存在し、それを入手することができたが、ここでは省略する。

## 5 家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の始原的な意図

フレーベルが家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の構想について、最初に言及した資料は、今日では1841年10月14日の日付をもつ、ハンガリーの伯爵夫人、テレゼ・ブリュンツビック（Gräfin Therese Brunsvik）宛の書簡においてであるとされる。要約すると、1）母親と女性の養育者のために、子どもの本性と価値とを意識化させる。丁度、まわりの家の構造に対して作用すると同様に意識化させる書物（教具）。2）子ども－対象それ自体－の自己自身の知覚を養う愛撫の歌は、a）自分自身の関係のもとで、b）子どもとの関係に寄与すべきものであること。3）同様に、話し方の道具、感覚の道具、四肢の道具として寄与する書物（教具）である。ここで注目される点は、家庭育児書の初期の構想が、親子関係の構造を意識化させる書物であることと同時に、乳幼児自身の感覚を鋭くすることに役立つ教材、幼児の四肢の道具として役立つ教材や教具の強調である。ここには、今日私たちが『母の歌と愛撫の歌』に抱くその芸術作品的な「ドイツロマン主義の精華」（O. F. ボルノー）といった印象とはかなり相違する側面を見いだす。基本的に同様な見解は、すでに言及した、1982年刊行のH. フレーベル／D. プフェーラー編“Kommt lasst uns unseren Kindern leben”，所収のKarl Rennerの論文、「フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の理解について」にも見られる。K. レンナーは、現代的な生理学的知見（ターム）も取り入れながら、本論文において『母の歌と愛撫の歌』の基本モチーフとして8点、要約的に指摘している。すなわち、原理的に1）母－子－関係から出発して、「遊びの歌」の構築、「歌」、「その子どもとの生の合一感情にひたる母親」である。フレーベル哲学から解釈されることは、具体的なもので、形而上学的なもの少ないこと。とりわけ、子どもの独自の身体が成人や子どもとの個人的関係において取り入れられていること。2）予感の養育、3）子どもたちのモトリーク（Motorik；脳から運動神経を通じて伝達される肢体・器官の運動）の訓練、4）感覚の養育、5）認知的習得、6）環境＝および事物との出会い、7）社会および心情的教育、8）人倫的・宗教的陶冶である。全体的に、K. レンナーによる『母の歌と愛撫の歌』刊行に関わるフレーベルの意図についての解釈の基盤は、ブリュンツビック伯爵夫人宛のフレーベル書簡と同一であると考えてよからう。

以上の考察から、「育児書」の本体である「絵」と「詩」に関する結論としては、以下のような結論が導き出せるのではなかろうか。

- 1) 『母の歌と愛撫の歌』は、当初、ウンガーの絵（その絵の中央にフレーベル作の詩が印刷され貼られている）と R. コール作曲の「メロデー本」の二冊の仮とじ本として1844年3月18日付で刊行された。
- 2) 『仮とじ本』の刊行にいたる過程で、かなりの頻度でオリジナル（作品）の差し替え（削除、新たな作品の付加等）があったと思われる。
- 3) 当初フレーベルが抱いていた家庭育児書とはかなり異なる『仮とじ本』が作成されたと思われる。それは、当時の出版事情が影響しており、とりわけ、編集員（出版業者のマイアーの意見等を含む）の意向が強く作用していたことが伺われる。
- 4) フレーベルが当初抱いていた『母の歌と愛撫の歌』の構想は、かなり具体的なもので、母—子—関係を両者の身体的触れ合いを起点に考え、それを「絵」、「詩」、「歌」の三者において示そうとしたのではないか。
- 5) 従って、以後刊行された家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』のランゲ版やプリュウファ版からそのまま、フレーベルの本書に対する意図、目的を判断することはかなりの問題を背負うことになる。

## 第二部 楽譜版 (Notenaufgabe) の考察

### 1 メロデーの成立史

家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』のメロデーの成立の背景を知るには、フレーベルの弟子で幼稚園教師であった I. ゼーレ (Ida Seele) の「回想 (Erinnerungen)」(In: Kindergarten 27 (1886), s. 37) の記述が当時の状況を生々しく伝えている。つまり、I. ゼーレの記述によれば、R. コール氏が作曲した「母の歌と愛撫の歌」のメロデーに自分の声がマッチしていたので、曲の下書きの段階でほとんどの曲を歌った。しかし、当初、音楽家 R. コール、フレーベル、そして W. ミッテンドルフ (Wilhelm Mittendorf, 終生フレーベルの協力者としてその事業を支えた) が互いに熱心に音譜を準備したにもかかわらず、「フレーベルはひとつのメロデーにも満足せず、それを了承することはまれであった」と述べ、フレーベルの願いは「つねに、根本にあるテキスト (フレーベル自作の「詩」、筆者注) を音に描くこと (Tongemälde) であった」と。この I. ゼーレの記述から、われわれは、『家庭育児書』の

メロデーに対するフレーベルの考えと (W. ミッテンドルフはフレーベルに近い) と作曲家 R. コールのメロデーに対する考え方に大きな違いがあることに注意する必要がある。その際、フレーベルが重視したことは、「音を描く (Tongemälde)」, つまり、一方で、テキストが、他方で、「絵」(Bilder) が存在、それらの共同作業で成立するメロデーが付加される、というものである。良く知られているように、音楽家 R. シューマン (Schumann) も芸術の三領域として、言葉、絵、音楽の結合を重視している。また、W. ミッテンドルフは、歌い方を探究して、それらは行為 (Tat), 言葉 (Wort), 音 (Ton) の結合にあるとした。この三者のメロデーに対する考えの相違が、実は、「メロデー本」の成立に錯綜した状況を生起させることになる。具体的には、すでに、Fr. ウンガーによって「絵」は制作され、「詩」(言葉) もフレーベルによって作詩され、準備されて、この「絵」と「言葉」を「音」に乗せる作業が、「メロデー」の制作、つまり「作曲」の作業であった。このような手順で『母の歌と愛撫の歌』のメロデーの作曲はなされるのである。

ところで、R. コールによって作曲された「メロデー」は、全体的に、「高音」すぎる、との批判を受ける。先ず、I. ゼーレによって歌われたようであるが、美声の持ち主の I. ゼーレ自身は、「(高音で) 歌うことは、難しくない」と感じていたが、フレーベルの側近の幼稚園教師たちが、「難しい曲」であると苦情を訴え、「子どもたちに多くの喜びを与えるような歌に変更するよう」求めた。当時音楽教師であった H. ダーレンキャンプ (Dahlenkamp) も「コール氏の作品は子どもたちにとって難しすぎる」と記している (vgl. H. König. Mein lieber Herr Fröbel, 1990, s. 129)。

この R. コールの作品に対する評価 (音程が「高すぎる」という) に対して、ほぼ、私と同じ資料を駆使して、近年、エアランゲン大学から博士 (Inaugural Dissertation) 号を取得された Ch. コンラート (Konrad) 女史 (三児の母親とのこと、ご主人が音楽学の教師) は、当時歌われていた多くの「子どもの歌」と比較し、音楽学の立場から、1) 音領域が1オクターブ超えていること。2) 音譜 (Notenwert) が多様であり、一(略)一 そのうえ、三連符と8分休符の多いことを、具体的な曲の分析を通じて指摘している。その上で、Ch. コンラート博士は、「曲は難しすぎる」と判定している (Ch. Konrad, Die "Mutter-und Koselieder" von Friedrich Wilhelm Augst Fröbel —

Untersuchungen zur Entstehungs-und Wirkungsgeschichte —, 2006, s. 112. なお、本学位論文は、Ch. コンラート女史から直接、私に CD-R で寄贈されたものである。

このような状況のなかで、子どもの声に合わせて編曲がなされる。しかし同時に、「批判は、音楽の専門的な評論家によらない編曲が顕著だ」と、Ch. コンラート博士は指摘している (ditto, s. 113)。

## 2 メロデー本の印刷

フレーベルは、家庭育児書の仕上げの過程で、『母の歌と愛撫の歌』の「メロデー本」をどこで印刷したらよいかという問題に遭遇する。Bad Blankenburg 近郊には音楽出版社はないし、フレーベルは音楽関係の専門分野の人々との結びつきはなかった。そこでフレーベルは、旧知の作曲家で、当時スイス在住の Xaver Schnyder von ヴァルテンゼー (Wartensee, 1786–1868) に書簡をおくり、音楽関係の出版社の紹介を依頼する。1843年10月21日付けの書簡で、Schnyder von Wartensee は、フランクフルト近郊の知人を紹介する。

当時、フレーベルは、楽譜版の編集も考えたが、とにかく、出来るだけ早くメロデー本の印刷を促進しようとする。1843年のクリスマス前の刊行は不可能であるという Schnyder von Wartensee の考えを受け入れ、フレーベルは、1843年10月29日、リトグラフ印刷所のアンドレ (Andrè) 社に以下の内容を付した書簡を送る。この書簡が、実は「メロデー本」の詳細な内容 (値段から、装丁や使用する紙質まで言及するという) を示しており、さらには、フレーベルの育児書に込める細やかな配慮が窺われる。なお、本書簡は、今日、BBF の Archiv, Nr. 317 および、BI, 20r, 20v として保存されている。今回、書簡類のタイプ化によって、初めて解読が可能になった。この書簡は、『メロデー本』(「楽譜」版) の解明にとって、極めて重要なものである。その宛名と発信日付を原文のまま引用し、その際、タイプ化の過程でどのように補足あるいは修正されるかの実例を示し、内容を要約して紹介する。([ ] 内は、タイプ化の過程で補足あるいは修正された箇所)

An die Wohllob [liche] Joh. Andresche Lithographische Anstalt für Noten-druckerei zu Offenbach bei Frankfurt a. /M. (尊敬するフランクフルト近郊オフエンバッハ、楽譜印刷所 ヨハン・アンドレ・リトグラフィ社 殿)

Blankenburg am 29. 8br [Oktober] 1843 (1843年10

月29日、ブランケンブルク)「私達は、現在、『母親達のための(43の)曲』のタイトルで音楽作品を編纂中です。それは、現在印刷中の大きな作品(『母の歌と愛撫の歌』の「絵」をさす[論者注])に対する旋律をなすもので、少なくとも、来月末までに出版されるでしょう。タイトルは、早期の、そして子どもらしさ等々、独自の養育のための「母親と愛撫の歌」(Mutter & Koselieder)。家庭育児書です。」(BBF, Archiv, Nr. 317から引用)。それに続いて、フレーベルは、現在印刷中の校正見本刷りを添付してそれにふさわしい「43の歌(曲)」を刊行してほしいこと等、記している。その上で、出来るだけ安く楽譜印刷が仕上がるようにとも書いている。末尾に、Schnider von Wartensee が、いろいろな観点から、楽譜印刷所として貴リトグラフ美術所を推薦してくれたことも付記している。

これらの手紙に続いて、以下の具体的な事項が記されている。そこには、この時期家庭育児書の刊行を急ぐフレーベルの責付くような気持ちが伝わってくる。

1. 貴殿は作品の印刷を出来るだけ早く、そして何時印刷を開始することができるか。
2. 何時までにこの作品(の印刷を)完成させ、引き渡してくれるかを約束し、決めてほしい。
3. 貴殿はこの作品のために、必要な、ふさわしい紙を貴殿の(刊行している)雑誌から回してくれるか。
4. もしそれが出来なければ、私の費用で、フランクフルトのフリッシュ紙屋から調達するが。
5. 印刷の納入価格はいかほどか。
6. 譲渡した紙代はいくらで、最終的に、全部でいくらか。
7. 支払い期限は、(紙代と印刷代)一緒か別々か。同時に、これらの問いに貴殿が肯定されるなら、最も重要なことをお知らせして、以下の問いを付け加えたい。

8. 歌の暫定的なコンセプトについて：(略)

9. フォルマート(活字組み用の詰め物)は、—(略)—主要作品にぴったり合っているか。そのために8ポ刷りの一葉を添付する。
10. 楽譜は、表現豊かで読み易く、従って、低級なぎっしり詰めて印刷しない。
11. 主要作品の発行部数は1,000部である(以下省略)。
12. 貴殿が作品の印刷を引き受けてくれるなら、作曲家の最終修正は必要か。
13. 最後に、重要な質問だが、楽譜のためのタイトル(の印刷)もまた貴殿の印刷所で印刷していただけるか、あるいはわれわれがどこかにお願ひしなければならぬか。

これらの文面から、Ch. コンラート女史は以下の三

点のまとめをしている。1. (書簡の) 執筆時にフレーベルは、43の歌を予定していたか、あるいは43の歌を作詩していた。2. 導入の(楽譜)タイトルは、家庭育児書がすでに印刷中であるか、構想中であること。3. 『母の歌と愛撫の歌』の発行部数は1,000部で、そこからまた、楽譜部数もそれに見合うものであること (vgl. Ch. Konrad, 2006, s. 118)。

いずれにせよ、フレーベルの上記の書簡からは、印刷を急ぐこと、印刷のための用紙の利用、値段の算出等々、実に、数に関する語彙で満たされている。

J. アンドレからの回答は知られていない。しかしながら、1843年11月8日付けのフレーベルの不完全な構想 (BIM Mappe XI 3, F 593, 26) が残されており、その中では、11月1日付けのJ. アンドレの記述に言及し、その中で、J. アンドレとの取引条件を了承し、銅板画制作と印刷の早急な進展を希望して、先ず、36ライヒスターラ (Reichstaler) を送金している。この間、フレーベルは異なった用紙の版を非難したり、推奨する「試し刷り」を作成させ、可能な限り早く返送することを求めている。その上で、フレーベルは「結び」の原稿の完成を待ち望んだ。楽譜版の完成の過程には、なお、編集の作業が新年にまで及んだ。その郵便物発信控え帳には、1844年1月29日付けで、J. アンドレが記載している。さらに、1844年2月10日付けのJ. アンドレの書簡、そして1844年3月11日付けの書簡と、これら三通の書簡が、特に、本テーマの解説には重要である。以下、これらの書簡類を考察する。

### 3 印刷、出版をめぐるフレーベルとJ. アンドレとの書簡

オフエンバッハ、1844年1月29日の日付をもつJ. アンドレのフレーベル宛の書簡は、当時、作曲家のR. コールの体調が優れないこと、その回復を願っていること。その上で、自分がタイトルを変更し、仕上げたので、それを添付すること。このようなデッサンをとまなう変更の作業は全体の調和を崩すので大変であったが、「作曲家と詩人の名前がこのような『歌』の場合、同様に際立つことが重要であると考えた」とJ. アンドレは判断している (Briefbuch André, Offenbach am 29. Januar 1844. 本資料は、Ch. Konrad, s. 119から引用)。この判断は、『メロデー本』が、フレーベルの「歌」に対する考えを優先させ、R. コールの主張を後退させた、と判定される。また、最初、43の『歌』が44になったと同時に、リトグラフの仕上げに

もこのように行った旨が記されている。その上で、6部を試しに作成したので、1部を、手紙とともに、Schneider (原文綴りママ) Wartensee に送付し、5部を貴殿 (フレーベル) に添えたことが述べられている。もう一つ注目すべきことは、良く読まれる新聞はライプツィヒにあるもので、少なくとも、この近郊 (フランクフルト近郊) にはないことが記されている。このことは、家庭育児書の「広告」をどこの土地の新聞で行ったら最も効果的か、というフレーベルの質問に答えたものと判断される。周知のように、フレーベル自身の執筆による「広告 (Anzeige)」が、1844年春出されている (すでに公表されているように、手書きのオリジナル資料と2部の広告印刷物が「フレーベル博物館」に保存されている (Mappe XIII 13. 本論資料 1 参照のこと)。

次の1844年2月10日付けのJ. アンドレの書簡は次のように始まる。「私は喜びをもって貴殿に伝えたい。私に依頼された印刷物が丁度いま出来上がったことを。従って、来週の月曜日ないし火曜日までには貴殿宛に直接、3個の包装で送付します」(Archiv der BBF des DIPE, Nr 317, BI, 24から引用)。当時の輸送状況からすれば、最も早くも2月18日にフレーベルは待望の『メロデー本』を入手したことになる。第2の包装には、「光沢紙にいろいろな金箔を付したタイトル」が施され、「重要な人物のために殊の外美しい部数」が含まれていた。値段は合計230.20ライヒスターラ (Reichstaler) であった (vgl. Ch. Konrad, 2006, s. 119)。

2月14日から19日にかけて、フレーベルとJ. アンドレとの往復書簡では、書物の値段の詳細な交渉が続く。中でも、注目を引くのは、J. アンドレが再版の折の条件にまで言及していることである。最終的に、1844年3月11日付けの書簡で、J. アンドレは、フレーベルからの最初の入金を得、その後、全金額の受理を記録している。最後に、J. アンドレの本書に対する強い関心と高い評価がなされている。

#### 第二部のまとめ

楽譜版 (Notenband) の完全なタイトルは、フレーベルによる44の『母—愛撫—と遊びの歌 (Mutter-Kose-Spiellieder)』の表題に、「子どもらしさの貴重な養育のために」という副題が付され、2声部からなる歌詞の曲付け、と記され、小文字で、ピアノ伴奏による「はじめの歌」、女性4部合唱の「おわりの歌」と、記され、中央に大文字でUND (そして) の一行によって、ロベルト・コール (ROBERT KOHL) に



よって、すべての母親と子どもの養育施設に捧げられる、と印刷されている(参考資料2参照)。それは最初のメロデー本の草稿と家庭育児書との混合とによってよい。各行が活版印刷で個々に植字され、その結果、全体の印象は不安定の感がある。欄外の装飾画も以前より簡素に、対称的に描かれている。絵の左右には、蔦が上に向かって植物に絡み付いて伸びている。葉の上には、子どもと天使が、そして、ハーブを奏でる女性と絵を描く女性が描かれている。そこには、フレーベルが願った「音を描く(Tongemälde)」理想が見事に描かれている。いずれにせよ、このタイトル表紙には、音楽(メロデー)と絵画の合一が示されているのである(資料2を参照のこと)。

#### 全体のまとめ

1 家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の発行年が記されていないこと(o. j.)の問題。私見では、フレーベルによる「詩」とFr. ウンガーによる「絵」とは、ほとんど1843年には完成されていた。しかし、それを「音に描く」(メロデー化) ことに関して、フレーベルと作曲家R. コールとの『音楽(メロデーを含む)』に対する思考の相違から、その制作にかなりの時間を要した。その結果、『母の歌と愛撫の歌』本体(絵本)の制作に係る件と、『メロデー本』作成とが、別々の編集者、印刷社に依頼する結果となり、発行年月が想定しにくい中での刊行を余儀なくされたことが想定される。

2 家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』は、「詩(言葉)」と「絵」と「メロデー(音)」の「三位一体」の育児指導書と高く評価されてきたが、その理想は必ずしも完全に達成されたものとは言いがたく感じられる。それは、本体の『母の歌と愛撫の歌』とその付録のよ

うな形体で『メロデー本』は刊行され、それは本体末尾に別冊として挿入されているのである。そして、なによりも、R. コールによる「メロデー」が子どもにとっても、母親にとっても、なかなかの「難曲」であった事実である。各国への伝搬の過程で、各国の「民謡」に編曲された事実がそれを物語っている。しかし、「言葉(詩)」、「絵」、「音(メロデー)」の「三位一体」というフレーベルの抱く「育児書」の理念は、今日の乳幼児の発達という観点から考えても、不滅の意義、意味を保持していると考えられる。特に、母親=子ども=関係を結ぶ「遊具」(共に身体的にかかわる)として、今日的時代状況の中で、家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の新たな利用の展開が期待される。

(本研究は、平成19、20年度、科学研究費補助金「基盤研究(C)」の交付による研究成果である。ただし、平成19年度については、本論の第1部を中心に、日本ペスタロッパー・フレーベル学会において発表し、それは同学会紀要『人間教育の探究』第19号(2007)に「フレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の成立に関する考察—未刊行資料の解読による考察(1)—」のタイトルで掲載されている。今回、それを第一部として、すでに公表されている論文を精査し、「要旨的にまとめ」、その上で、20年度の研究、フレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の「メロデー本」の考察と一体化して、本論文で家庭育児書全体の考察を行った。なお、本紀要の規定では、文献の引用表記に関して定めがあるが、拙論では、未刊行のオリジナル資料や書簡を利用したの論究である点、さらには、論文の「分量」をかなりオーヴァーしている点、文献の引用に関しては、文中に括弧( )で挿入し、参考(文献)として収集したオリジナル「資料」を末尾に掲載した。)

#### Summary

The purpose of this study is to make uncovered the Song and Music of Fröbel's Mother Play ("Mutter- und Koselieder") and to explore the whole idea of his book for child care in home, with which finally to make clear Fröbel's pedagogy totally.

This purpose is achieved by reading unpublished material (including 1) BN Nachlass of Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschung in Berlin, 2) BIM Nachlass of Fröbel Museum in Bad Blankenburg, and 3) NK Nachlass of Prussian Culture Foundation in the manuscript section of Berlin State Library).

資料1 『母の歌と愛撫の歌』に関する「広告」(Anzeige)

Es eben ist in unserm Verlage erschienen und durch alle solide Buchhandlungen, so wie gegen Nachnahme durch jede Post unmittelbar von hier zu beziehen:

Anzeige.

Ein christlicher Familienbuche... getrieben von Liebe des Vaters und aus Rücksicht auf den Zweck der selben zu freiem Gebrauche, nachfolgende Ausgabe an und ein, um des Stud. in die, für ihre Kinder Recht lebendigen Familien einzulassen; indem wie solche hiermit aufnehmen, glanz im mir, bis hierher wollen diese das Leben und Zeit dieses, jedoch durch die Vorzüge für sich geminnlichen Zweck, hoch zu halten.

„Kommt, laßt uns unsern Kindern leben!“ Mutter- und Koselieder.

Dichtung und Bilder

Pflege des Kindheitslebens. Ein Familienbuch

von Friedrich Fröbel. Mit Handzeichnungen, erklärendem Texte und Singweisen.

„Der heil'ge Geist liegt oft im kindlichen Geist.“ Auf feinstes Kupferdruckpapier in Imperial-Octavo mit 50 Tafeln in Stahl geätzte Handzeichnungen und gleichem sinnvollen Titel und Umschlag auf farbigem Papier, nach Maßstäblichkeit mit 44 zweisinnigen Koseliedern, componirt von Robert Kohl, als Beilage.

Preis: Das Ganze Nr. 4, Preis 1 Thaler, oder Nr. 7, 1 Thaler, das Familienbuch allein Nr. 21, Preis 1 Thaler, oder Nr. 23, 1 Thaler.

Blankenburg bei Rudolstadt, im Frühling 1844.

Die Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit und Jugend.

(実物は19×19 cm)

資料2 『母の歌と愛撫の歌』の表紙



Dichtung und Bilder

mit



Pflege des Kindheitslebens.

Ein Familienbuch

Friedrich Fröbel.

„Der heil'ge Geist liegt oft im kindlichen Geist.“

Mit Handzeichnungen, erklärendem Texte und Singweisen.

Blankenburg bei Rudolstadt, Nr. 21, 1 Thaler, oder Nr. 23, 1 Thaler.

(実物は19×28 cm)

資料3 Fr. ウンガーによるタイトル表紙



(実物は19×28 cm)

資料4 フレーベルから R. コール宛直筆書簡 (1844年2月26日付)

Abendbesuch am 26. Februar 1844.

Mein lieber Herr Rost,  
 in dem glücklichen Stande ist es Kindheitspflege  
 einig gewohntes Freund.

Ich muß Ihnen ganz genau meine Willen zu einem nicht  
 ganz richtigen Auffassung Ihrer so lieblichen und kindlich  
 unfehlbaren Dingen von Seiten der richtigen  
 Erziehungen, sind ich Ihnen beizubringen 2 Exemplare  
 des Familienbriefes, das eine in einem das zweite in  
 gelben Umschlag zur Vorführung nach Leipzig im Hofe,  
 selbst der ersten gebildeten Musikanten. Das Familien  
 Brief im gewöhnlichen Umschlag habe ich auf mich  
 dem Empfänger anzuhalten, sonst sieht ich Ihnen schon ge.  
 kann beide zurück gelassen, und nicht allein direkt  
 mich die in Vorlegung zu setzen, zu welchen der beiden  
 Annehmlichkeiten Sie so werden sollen.

Mögen Ihnen Ihre Tage Arbeiten ein wenig und so  
 viel Mühe sparen, daß Sie die Tage nicht bald abzu,  
 den können.

Sagen Sie mich so gut und geben Sie die folgende für meine  
 Gefährdung ein Willensdruck zu Aufsicht ab; an mich, wie  
 das es jetzt so etwas Briefe haben können; ich auf mich  
 nicht zu haben. Lieber, das sie so einbezogen Herr R.  
 halten Sie mich Ihre unfehlbare Pflege des Kindes,

(実物大)

